

水田ハローを利用した乾直部分耕播種機の試作

中橋 富久*・山下 勝男・伊藤 久司

水稲乾田直播栽培において、不耕起状態で播種作業を可能にするため、水田ハローを利用した部分耕播種機を試作し、圃場適応性について検討した。

1. 方法

1) 試作機の概要 試作機の外観は図1のとおりで、水田ハローの爪配列を変換して不耕起部分を作り、そこへ上方に設けた播種装置により、籽を落下させ、耕起部分の飛散土で覆土するようにした。

2) 試験区の構成 部分耕区と対照区を設け、前者は播種までの主な作業としてNa1は除草剤散布、Na2は浅耕した後にそれぞれ部分耕播種を行い、後者は2回耕起した後、更に耕起同時播種を行った。

3) 耕種概要 水稲品種 ころもづし

播種作業 平成4年：5/2 部分耕区（降雨1日後）、5/4 対照区（降雨3日後）、平成5年：4/26部分耕区、対照区（降雨1日後）

播種後作業 乾田期：スタム乳・サターン乳・バサグラン液混合散布（播種29～36日後）、湛水期：入水（播種37～45日後）、プッシュ剤散布（入水5～8日後）

2. 結果および考察

1) 播種時の土壌含水比は、対照区においては両年と



図1 部分耕播種機（模式図）

表2 苗立調査

試験区	平成4年					平成5年				
	実播種量 kg/10a	苗立数 本/m ²	苗立率 %	欠株率* %	出芽深度 cm	実播種量 kg/10a	苗立数 本/m ²	苗立率 %	欠株率* %	出芽深度 cm
部分耕区										
Na1	4.7	32.7	20.1	17.9	1.7	4.8	34.3	22.9	10.0	3.0
Na2	4.7	59.2	36.4	4.8	1.8	4.8	50.0	29.5	5.6	3.3
対照区	4.3	68.9	46.7	1.2	2.5	3.8	44.3	33.0	6.0	3.6

注) 1) 欠株率 = {Σ (30cm以上苗立間隔 - 15cm) / 調査区間全長} × 100

2) 設定播種量は 5 kg/10a

表3 成熟期および収量調査

試験区	平成4年						平成5年					
	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	千粒重 g	精玄米重 kg/a	同左比 %	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	千粒重 g	精玄米重 kg/a	同左比 %
部分耕区												
Na1	74.0	20.4	470	22.7	55.5	106	67.5	21.1	276	24.0	47.0	102
Na2	75.5	20.1	431	22.5	59.0	112	69.0	22.1	320	23.8	46.6	101
対照区	76.3	19.1	391	23.4	52.5	100	69.2	21.1	250	24.4	46.4	100

* 現在・彦根県事務所農産課

も上層は20%台と低かったが、下層は高く、トラクタの走行にやや困難を感じた。一方、部分耕区においては一部を除き上・下層とも比較的高い含水比を示したが、トラクタ走行性は良好であった。また、碎土率は、部分耕区Na2が最も高く、浅耕した後に部分耕播種する方法は、冬雑草の再生が散見されたものの、湛水によって抑えることができ、有望とみられた（表1）。

2) 部分耕区の播種作業は、Na1では枯れた冬雑草と前作稲の刈り株がそのまま残っていたため、苗立数、苗立率が対照区より劣ったが、Na2の苗立数、苗立率は対照区とほぼ同程度を確保できた（表2）。

3) 部分耕区の穂数は対照区より多くなり、収量はNa1で2～6%、Na2で1～12%、対照区を上回った（表3）。

以上より、試作した部分耕播種機は浅耕圃場において高い播種精度を有し、苗立、生育、収量も対照区と同程度あるいはそれ以上となり、浅耕→部分耕播種体系の有効性が認められた。しかし、苗立数の確保、漏水防止等の問題を残した。

表1 播種時の土壌含水比・碎土率

試験区	含水比 %		碎土率 %
	上層	下層	
平 部分耕区Na1	47.8	—	43.5
・ Na2	38.9	—	71.7
4 対照区	27.5	45.0	47.5
平 部分耕区Na1	44.6	41.5	58.1
・ Na2	28.0	42.1	78.4
5 対照区	25.7	38.0	65.5

注) 碎土率は直径2cm以下の土塊の重量割合